

H. Myint: *The Economics of the Developing Countries*. Hutchinson & Co. Ltd., London, 1964. 192p.

去る5月末、ミント教授が国際シンポジウム「東南アジアにおける日本の将来」に出席するため比叻山ホテルにこられたとき持参されたのが本書である。教授はこの著書になかなかの自信があるようで、近く邦訳が出版されると楽しげに語っておられた。

このシンポジウムで教授の読まれたペーパー「アジア経済発展の2つの型——内向型と外向型——」とは、きわめて好評であった。「中央公論」昭和40年9月号に全文が翻訳されてのっている。

このペーパーが高く評価されたことは、教授の経済学理論水準の高いことと、低開発国における経験なり認識なりの深いこととによろうが、とにかく教授の学殖を裏づけるに十分であった。

戦後いち早く「厚生経済学」(Hla Myint, *Theories of Welfare Economics*, London, 1948.) をロンドンで出版した鬼才である。教授は独立後のビルマに帰国し、ラングーン大学総長となった。しかし、ビルマではいれられず、現在はオックスフォード大学の低開発国経済の Senior Lecturer である。教授は、「現在、自分は東南アジアよりも、アフリカやラテン・アメリカに興味をもっている」と私に語ったが、これは母国ビルマを中心として東南アジアの実態を熟知しているから、いまそれ以外の後進地域のデータも集めているとの意味のようであった。

こうした広いデータと、「厚生経済学」以来の教授の近代経済学の知識との集積が、本書「低開発国の経済学」であるといえよう。

本書は200ページたらずのものであるが、ここに低開発国経済学の主要問題が、きれいに論理的に組み立てられている。

教授は低開発諸国の間に、人口圧迫と経済成長度の2点において、かなりの相違があるとの事実認識から、低開発国経済論を組み立てる。この相違こそ、低開発諸国の経済を特徴づける具体的な「貧困」またその解決方策を各国で異ならしめているとする。

そこで、第1部として人口圧迫のない後進国経済の問題点として、農民生産物輸出の増加と貨幣経済の成長、鉱山、プランテーションの発達と貸銀経済の成長、2元的金融制度と金融制度の従属性・独立性をと

りあげる。

第2部は、人口圧迫下の後進国経済の問題点である。そこでは、人口圧迫と総資本必要、経済発展のための基本的最低努力と均衡のとれた成長計画の規模、均衡のとれた成長の型と経済発展率、国際貿易と経済発展等の問題を分析する。

最後の章、開発政策の一般的諸問題として、開発政策のディレンマ、市場機構、教育投資、国際的援助の4項目があげられる。

ミント教授は、私には、きわめて明晰であり、かつ分析的な性格の持ち主であるように思われる。その反映として、本書は、低開発国の経済をどう開発すべきかという実際の問題よりも、低開発国経済の性質分析ともいべきアカデミックな問題に重点がおかれている。この意味での低開発国経済論としては、本書は、今日の世界的最高水準をゆくものと思われる。東南アジア諸国の経済開発を研究するためには、本書はその理論的基礎をうるために、ぜひとも一読されなければならない。(本岡 武)

Herbert Phillips: *Thai Peasant Personality*, Univ. of California Press, Berkeley & Los Angeles, 1965, xii+231p.

John E. de Young 著の *Village Life in Modern Thailand* が本書と同じ Univ. of California Press で1955年に出版されて以来、タイ国に関する人類学的地域研究の成果が何冊か出版された。1960年 Thomas M. Frazer Jr. の *Ruesmiban* が出版された時にはタイ国の地域研究もこれまで進んできたかという感が深かった。ところが、最近になって本書を手にとることによって、さらに、わたくしどもはアメリカにおける行動科学と地域研究の発達に目をみはったのである。

De Young から Frazer にいたるまで出版された単行本のほとんどが、村落調査を総合的にまとめたもので、どちらかという経済、社会、宗教などを総花的にまとめたものである。もちろん、そのなかでは Frazer の *Ruesmiban* がかなり理論的色彩のつよい本であるが、全体としては従来の研究傾向を踏襲している。だが、本書は村落調査でえた資料の基礎のうえに書かれたものであるけれども、主題の扱いがいままでの書籍とことなり、いちだんと精密度を増した。そ

の意味で、アメリカにおける東南アジア研究がすでに第二段階に入ったことを知るのである。

本書はタイ国の首府バンコク周辺にあるバン・チャン（コーネル大学の地域研究プロジェクトがおこなわれた村）で、2カ年あまり調査をしたタイ農民の性格の研究である。

研究の目的としては、第一に中部平原におけるタイ人の成人にかんする性格的特徴の基礎的記述、第二には、いろいろな文化における性格の比較研究が当面している方法論的、理論的、技術的諸問題の解明である。

基本となっているデータは、直接観察による資料と、バン・チャンにおける111人におよぶ客観テストによるものからなっている。本の内容はつぎのようにまとめられている。第一章 バン・チャンの村、第二章 タイ人の性格にかんする客観的観察、第三章 調査の方法論、第四章 文章完成法、第五章 文章完成法によるタイ人の性格研究、第六章 タイ文化からまなんだもの。それに手頃な文献集がついている。

以上のような内容のなかで、著者はタイ人の「個人主義的」な傾向が人間関係にどのような影響をあたえているか分析している。また、たいへん興味ぶかいのはJohn E. Embreeが1950年に書いた論文“Thailand-A Loosely Structured Social System”, *American Anthropologist*, No. 52, PP. 181—103 以来、タイ人社会の特徴を示す用語となった‘loosely structured society’が、どのような過程で形成されるかということ、育児過程や小乗仏教との関係にまでおよんで論じていることである。

地域研究のなかでも、とくに心理学的接近法をする場合には、現地語の高度な知識とフィールドに長期滞在するということが、不可欠な条件であるということを、本書が教えるのである。

著者はカリフォルニア大学人類学部（バークレー）の準教授で、同大学の東南アジア研究センターのチェアマンである。同氏は今年の初夏から、タイ国で戦後に出現した‘あたらしいエリート’の研究に従事している。有能な人類学者だけに、その成果が期待されるのである。（飯島 茂）

Phaithun Kruakao, Dr.: *Laksana Sangkhom Thai lae Lakkan Phatthana*

*Chumchon*. Bangkok, 1963. 425p.

タイにおける地域開発の歴史は、1958年内務省内務局に、部内措置として「地域開発室」が設置されたことにより新しい局面に入る。同年10月、クーデタによって政権を握るや、「国家開発（Kan Phatthana Prathet）」を旗印に、つぎつぎと意欲的な施策を展開して行った故サリット元帥の強力な支持をえて、「地域開発室」はまず「部」に昇格し、ついで1962年には4課1室を擁し、全国の県・郡にまたがる巨大な下部組織にささえられる「地域開発局」へと発展した。本書は同局の研修課長であり、同時にタマサート大学、カセーサート大学で「地域開発論」、「社会学」を講じている Phaithun Kruakao, Ph. D. (Cornell) の労作である。その内容から見るに、おそらく同博士の担当する内務省地域開発指導員（Phatthanakon）の研修用テキストとして執筆されたものと思われる。

全体は補遺に含まれた独立の2論文をあわせ4部12章に分けられている。第1章は「タイ国民と地域開発」と題する総論。第2部「タイ社会の特質」は、「タイ社会の価値体系」（第2章）、「タイの社会的階層」（第3章）、「農村社会としてのタイ社会」（第4章）、「タイ社会の他の特質」（第5章）の4編の論文を含む。この部分は、本書を、その実践的目的から離れて、われわれ外国人読者にとってきわめて示唆的な内容をもつものになっている。

これまでタイ社会の特質について論じたものといえは Ruth Benedict の戦時中（1943）の論文“Thai Culture and Behavior”（Cornell Univ. Data Paper Number 4, 1952）のほか、屢々引用される John F. Embree の古典的論文“Thailand-A Loosely Structured Social System”, *American Anthropologist*, No. 52（1950）など、いずれもタイとは文化的背景を異にする欧米——とくに米国の学者の筆になるものばかりであった。したがって本書の第2部におさめられた一連の論文は、新しい方法論を身につけたタイ社会学者によるタイ社会の分析であるという点において、ユニークな価値をもつ業績といえよう。

たとえば第2章においてタイ社会の価値体系を論じた著者は、タイ人が“yok yong”すなわち「価値があると認める」資質として、(1)富、(2)権力、(3)年令・年功、(4)“Chao Nai”であること、(5)“Nak Leng”の心、(6)寛容、(7)報恩、(8)知識あること、